

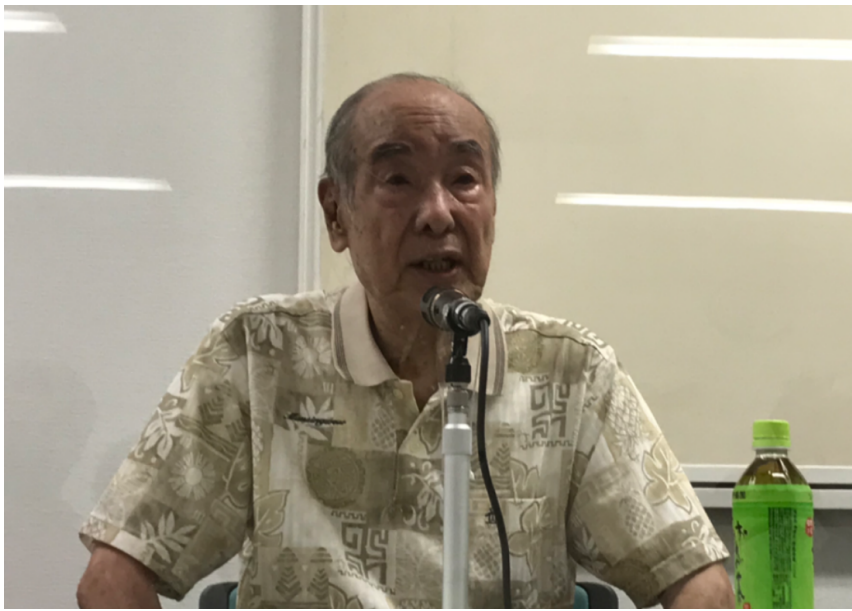


発行元 芦屋市立あし生活センター
編集長 吉原大翔

降り続く、爆弾の雨

芦屋市シルバー人材センターシニアライフ・トータルサポートグループが主催する太平洋戦争の体験を語り継ぐイベントが7月9日、同センターであった。参加した芦屋市在住の美野欣三郎さん（1931年生まれ）は、旧制中学時代に神戸大空襲にあった1人だ。美野さんは、ロシアによるウクライナ侵攻で民間の施設も爆撃の対象になっていることに触れた上で、こう切り出した。「私は、太平洋戦争で同じような体験をしました」

美野さんが語る、大空襲！



1945年3月17日の夕方から夜にかけて神戸に

九死に一生、偶然の行動

神戸襲う5度の衝撃、戦災者55万人超

神戸市文書館の資料によると神戸市上空にB29が現れたのは合計84回に及んだ。空襲による戦災者は55万5千人以上に上ったと推定される。その中でも規模の大きかった5回の空襲を神戸大空襲と呼ぶ。

4回目の大空襲にあたる6月5日、朝から警戒警報が発令されていた。母親が焼け残った家財道具を守るために外に出そうと言ったが、美野さんは何を思ったのか「僕は嫌や、お母さん一人でやり」と畳の上に寝転がって家財道具を外に出さずにいた。そうしている

B29（米軍戦闘機）が襲来し、神戸市内に攻撃を加えた。神戸市兵庫区荒田町に父親と母親と3人で住んでいた美野さんは、「俺は家を守る」と動かなかった父親を置いて、母親と2人で天王山に避難することになった。

中から煙が出ていた。「周りに帯はまさに地獄で、多くの死人やけが人が出て阿鼻叫喚の状態でした」と美野さんは言う。翌日の昼になって父親の様子に気になり戻ってみると、荒田町の一角が焼け残っていた。焼け残った家の中から「お母さんは大丈夫か？ 帰ってこい。飯が炊けてるぞ」と言う父親を見て尊敬の念が絶えなかったと振り返る。（撮影・吉原大翔）



と、町内会長から「防衛のために所定の配置につくように」との指示があった。配置場所に着くと焼け跡に油脂爆弾が落とされるのが

見えた。しばらくして町内会長の家が燃えていると言ったが、2時間ほどで全て燃え尽きてしまった。家

航空機工場、壊滅

少年が見た終戦への"みち"



に帰ると焼け跡に荷物を置いていた人が、爆弾が落ちて亡くなったことを聞いて、母親が「本当に荷物を

出さなくてよかった」といった言葉に重みを感じたという。（写真は当日の資料より）

1945年2月、学業を中断し勤労奉仕にあたるように、と美野さんは命令を受けた。西明石にある軍航空機工場での作業だった。日曜日は最低学年の美野さんらは休みだが、一つ上の学年は仕事に従事しなければならなかった。勤労奉仕が始まって2カ月ほどたった日曜日、警報が発令された。工場外に避難するよう学生に指示が出た。彼らは明石公園に避難したが、グラマン（米軍戦闘機）が低空飛行で向かってきて、学生達は機銃掃射に襲われた。学生10人が死亡、数十人がけがを負う事態になった。この話を翌日、工場の職員

から美野さんは聞き、震え上がった。それから2カ月ほどたち、美野さんが工場内にいる時に警戒警報が発令された。美野さんらは教師を先頭に山へと避難した。工場に帰ると、工場は潰れていた。工場再開までの間自宅待機の命令が出されたが、工場が再開されることなく終戦になった。終戦の約1カ月後学校が再開された。美野さんは「勉強なんてして一休何になるんだ」と言う気持ちだった。最後に「戦争は非常に悲惨なものです。二度と戦争は引き起こしてはならない」と強く語った。（写真は当日の資料より）